



水大学園だより

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <https://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学 生 課

「昭和99年に想う」

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
理事（水産大学校代表）

荒井修亮



平素より保護者の皆様をはじめ関係各位におかれましては、水産大学校の運営に際して、多大なご支援とご理解を賜り、まことにありがとうございます。

今年2024年は正月から能登半島の地震、航空機事故、そして小倉における大火事など、テレビのニュースから目が離せない大惨事が続きました。不幸にも災害でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族には謹んでお悔やみを申し上げます。

さて今年は昭和99年になります。昭和生まれにとって子供の頃、「明治は遠くなりにつれ」とか「今年が明治100年だ」といったことが巷で言われていたことを思い出します。まさに日本の歴史上の大転換であった（だろう）、明治維新からの明治・大正・昭和を振り返っての感慨であったのではないかと思います。今年の昭和99年ですが、昭和・平成・令和を振り返れば、「明治100年」に負けずと劣らず、日本の歴史上の大きな出来事があった1世紀であったと言っても良いのではないのでしょうか。言うまでもなく、第2次世界大戦の敗戦、そして戦後の焼け野原からの奇跡ともいわれる復興と高度経済成長。一時は「Japan as No.1」と呼ばれたものの、結局は平成バブルの崩壊とともに、ままたらぬ経済の低成長で「失われた30年」とも言われる時代。思えば人の人生の3世代ほどにあたる年月でこのような大きな変革と絶望の繰り返しがあったわけ

です。

直近では、新型コロナウイルスによるパンデミック。この間の水産大学校における対応については「水大学園だより」で繰り返し述べていただきました（「コロナと生きる、その1（第49号）、その2（第51号）、その3（第53号）」）。昨年の5月に新型コロナが感染症法上の二類感染症相当から五類感染症になり、ようやく普通の学園生活が戻ってきました。パンデミックの期間、卒業式や入学式等は縮小を余儀なくされました。ようやく、この3月の卒業式ならびに4月の入学式は、ご来賓、ご父兄、そして在校生の参列による式を行うことが可能となりました（本科卒業生は入学式を中止せざるを得なかった年次です）。卒業式は3月20日（水、春分の日）、そして入学式は4月3日（水）を予定しています。

令和6年度は国立研究開発法人 水産研究・教育機構の第5期中長期計画（令和3年度から5カ年）の4年目となる年です。本計画において水産大学校は、「水産資源の適切な管理を推進しその持続的利用に寄与する人材育成」、「水産業の成長産業化のための生産技術の開発・社会実装に寄与する人材育成」ならびに「水産に関する広範な知識と技術を有する技術者や海技士の育成」を3つの大きな柱としています。6年度も本計画に従って、人材育成に資する教育・研究を進めるとともに、第6期中長期計画（令和8年度から5カ年）の検討を始める予定です。新しい令和の時代に相応しい、明るい展望を描きたいと考えています。

最後になりましたが、この3月末で理事（水産大学校代表）を退任することになりました。着任以来4年間、皆様方のご協力を心より感謝するとともに、これからも水産大学校がより一層、発展することを祈念しております。ありがとうございました。

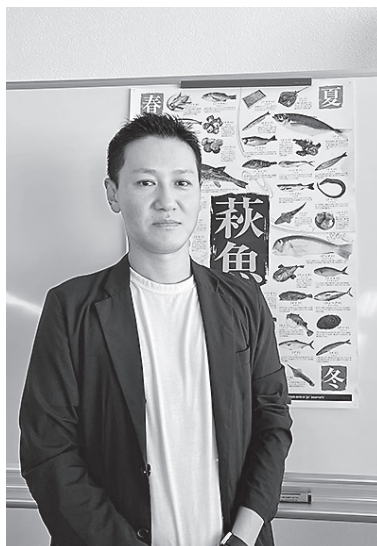
最近の話題

「馬関せんべい」販売開始

水産流通経営学科 助教 刀 禰 一 幸

2023年10月1日に「馬関せんべい」が発売されました。馬関せんべいとは、株式会社吉田水産様（下関市）が販売する海鮮せんべいで、「水産大学校

監修」として、本校食品科学科の和田律子教授と私が商品開発（商品のスキーム作りから）に関わったものです。どのように関わっているかというと、この商品の原料に、和田教授が行う低・未利用魚の有効利用に関する研究に基づいた低・未利用魚を使用していることです。低利用魚としてキダイ（規格外サイズ）のすり身を、未利用魚としてアンコウとハ



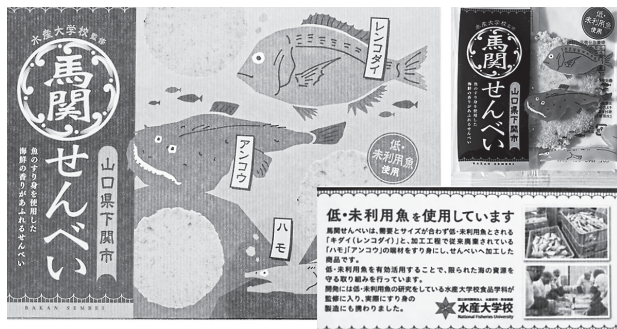
ものすり身（吉田水産によって従来廃棄される中骨を、骨肉分離機を使用して身を抽出）を原料として使用しています。

和田教授は、2011年頃より低・未利用魚の有効利用を目的とした研究を行ってきました。具体的には、下関市の沖合底曳網漁業で漁獲された低・未利用魚を

「すり身」等に加工し、鮮度測定などをとおして利用可能な条件などについて研究をされています。この研究は、従来廃棄されているものや、サイズが小さい等の理由から規格外とされ評価（価格）が低いものに付加価値を与えることを目的とした意義深いものです。低・未利用魚の有効利用は、食料安全保障の観点からも重要なもので、持続可能な社会の実現にも寄与します。

水産流通経営学科に所属する私の役割は何かというと、商品のスキーム作りです。例えば、すり身を使って何の製品を作るか（原料価格も考慮）、どういった企業と取組むか、マーケティングをどうするか等の素案を作り、関係者への相談や交渉を行いました。実は、素案を作ってから、馬関せんべいができるまでに約2年の歳月がかかりました。この間に、吉田水産様は元より、最終製品の製造業者である山口油屋福太郎様（九州の銘菓「めんべい」（辛子めんたい風味せんべい）を製造する老舗総合食品企業）、水産大学校の学生（水大生）など多くの方々にお世話になりました。

馬関せんべいの開発から販売において、多くの水大生が関わっています。例えば、和田教授と共に研究した学生達には、すり身試作や官能検査などにご協力いただきました。また、水大生協などの学生有志によりマーケティングの一環として商品のポップを作成いただきました。そのポップは唐戸市場やカモンワフなどに展示されています。学生にとってもこうした地元企業との連携が、マーケティングなどを実践的に学ぶ好機となっていると幸いです。



再び世界の舞台へ

－米国地球物理学連合での発表

海洋生産管理学科 教授 柏野 祐二

2023年12月10日から17日の間、米国サンフランシスコに出張して、そこで開催された国際学会である米国地球物理学連合（American Geophysical Union、略してAGU）の秋季大会に出席してきました。その報告をしたいと思います。

まず、AGUですが、1919年に米国に設立された由緒ある地球物理学に関する学会で、その学会で発行されている Journal of Geophysical Research などの雑誌は権威ある地球物理学の雑誌として世界的に読まれています。柏野が本校で教えている海洋物理学・海洋気象学も地球物理学の一分野であることから、柏野もこれまでに主著論文6本をこの学会の雑誌で発表しています。

この度の会合では、コロナもほぼ終息したことから、世界中からオンラインも含めなんと23,000人もの研究者が参加する大きな大会となりました。会場はカリフォルニア州サンフランシスコにあるモスコーンセンターという巨大な会場を借りて行われました。写真はそのポスター会場のほんの一部ですが、ご覧の通りポスターが数千枚張られた会場で、千人規模で発表が行われました（ポスターは1日ごとに張り替えられたので、その5倍のポスター発表が行われています）。

このたび柏野はこの学会にて、昨年および今年の1月に日本海で実施した耕洋丸の観測結果の発表をポスター・口頭のそれぞれ1件ずつ計2件行いました。その時の観測の様子は2023年2月2日にテレビ朝日の「報道ステーション」および2023年12月15日に同じテレビ朝日の「タモリステーション」で放映されているので、ご存知の方は多いと思いますが、冬の荒れた日本海で日本に豪雪をもたらす日本海寒帯気団収束帯（JPCZ）の観測を行ったものです。学園だより第52号で「世界を相手に」というタイトルで投稿しましたが、この2回の観測もJPCZの洋上観測としては世界初の観測です。そしてその観測を通して日本における豪雪のメカニズムを解明し、さらにはこの10年で最強寒波と呼ばれた2023年1月の寒波が北極の寒気がちぎれて日



ポスター会場の様子

本海にまで南下してきたことを突き止めるという、世界レベルの研究成果を挙げました。このたびは、その世界レベルの研究成果を世界の地球物理学の舞台である、AGUにおいて発表したものです。

今、日本の水産業は右下がりの状況ですが、世界レベルで見れば水産業は成長産業です。したがって学生の皆様も水産で身を立てることを考えるのであれば、日本にとどまらず、世界の舞台に打って出るようにしてください。

漁網の付着物

海洋機械工学科 助教 藤原 慎 平

筆者こと藤原は水産用水中ロボットの研究開発を行っています。現在は漁網の付着物を自動で掃除する水中ロボットを用いて、養殖網の自動清掃システムの開発に取り組んでいます。

一口に付着物といっても、貝類や海藻、はたまた甲殻類など様々です。特にマグロやブリなどの大型魚の養殖網では付着物も大型になります。そして付着して日数が経つにつれてさらに大きく強固になり、簡単には剥がせなくなり、漁業に悪影響を及ぼしてしまうのです。しかし逆に言えば、貼りついてから日が浅い状態では付着物は弱いため、短い周期で定期的に清掃を行えば網を綺麗な状態で保つことができるという発想のもと、定期的に網を掃除する水中ロボットを定着させておけばよいと考えたのです。

そこで付着物の種類や経過を観察するために、実海域に網を保持したまま5カ月間の経過を調べるといふ試みをしました。網を投入したのが6月中旬で、そこから定期的に網を陸揚げして付着物を確認していきました。始めは細かい藻が着くだけで大きな付着物はありませんでしたが、8月を過ぎたあたりから小さな牡蠣やフジツボが着きだしました。

ここまでは予想通りだったのですが、9月になると一転、沢山のヤドカリやタツノオトシゴ、小さなワタリガニなどが居着き始めたのです。タツノオトシゴやワタリガニなら遊泳できるのでそこまでの驚きはありませんが、フロートを付けて海底から浮かせてある網まで、ヤドカリがどのようにして移動してきたかが私には全くわかりませんでした。

さらに10月、網に釣り針がいくつか引っかかっ

ているのを発見しました。網を保持してある場所は遊漁者も自由に出入りできる場所であったため、これはある程度予想はしていました。筆者は魚釣りが趣味なので、釣り針を見て鱈釣り用の針であることがすぐにわかりました。秋の鱈釣りシーズンは10月からであるため、また網を保持してある場所の海底が砂地であるため、確かに時期も場所も合致するなど独りで納得していました。

そして11月中旬、網を回収する日が来ました。この頃には8月に着いた牡蠣やフジツボがさらに大きくなり、また海藻が芽吹く秋に入っているため、何種類か海藻が目立っていました。これまでの観察結果をもとに、何日に1回のペースで掃除すれば少ない労力で済むか、また水中ロボットに搭載する掃除機はどのようなものが適しているかなど、いろいろ考えるための材料になると思います。

研究成果のアウトプット

食品科学科 准教授 杉 浦 義 正

私たち教員は日々、教育・研究活動を行っています。研究活動は卒業研究のテーマとなったり、その成果情報が講義の内容に取り入れられる等、教育活動にも関連します。この研究活動を進めるには資金が必要であり、その活動は外部資金等が得られることによって初めて成り立ちます。外部資金等の提供元は主に「社会一般」であり、研究成果やその情報を社会一般に向けて発信（アウトプット）して還元する必要があります。

そのため、研究成果のアウトプットに関する活動として今年度は、①山口県大学 ML（ミュージアム・ライブラリー）連携特別展、②アグリビジネス創出フェア 2023、③下関市立しものせき水族館「海響館」オープンラボにそれぞれ出展・参加し、研究成果等を公表しました。

①山口県大学 ML 連携特別展

山口県内の大学・短大で開催され、研究成果を地域に広く公表するための展示会です。水産大学校では附属図書館で令和5年11月1日～12月26日まで開催され、海藻ポリフェノールのアレルギー抑制の研究成果についてパネル展示と資料配布を行いました（写真）。



②アグリビジネス創出フェア 2023

令和5年11月20日～22日まで、東京ビッグサイトで開催されました。この展示会は、農林水産・食品分野の研究で得られた成果をブース展示やセミナー等で来場者に分かりやすく紹介し、出展者と来場者間の共同研究などの提携を促す、技術交流の場です。今回は島根県西ノ島町との共同研究の成果（褐藻ツルアラメやノコギリモクの抗アレルギー効果）を出展し、パネル展示と資料配布を行いました。研究成果に対して、食品・製薬メーカーや原料会社、商社などの来場者の方々から興味を示して頂き、今後、さらなる研究の発展を期待しています。

③「海響館」オープンラボ

オープンラボは「海響館」来場者に向けて水産分野やその研究の魅力を伝え、研究成果等を公開する場です。当方による出展はコロナ禍で中断していましたが、今年度は令和6年1月6日～19日まで出展しました。海藻成分と健康効果、海藻ポリフェノールの抗アレルギー効果・花粉症予防について、パネル展示と資料配布を行いました。特に、出展時期が花粉症シーズンの手前であることから、来場者の方々にとって花粉症予防への有益な情報となることを期待しています。

第20回国際有害・有毒藻類学会への参加

生物生産学科 講師 山崎 康裕

令和5年11月5日から11月10日にかけて、広島市のグランドプリンスホテル広島にて開催された20th International Conference on Harmful Algae (ICHA2023: 第20回国際有害・有毒藻類学会大会)は、The International Society for the Study of Harmful Algae (ISSHA: 有害・有毒藻類学会)によって開催されている国際学会です。通常、この大会は2年に1回のペースで開催されていますが、近年はCOVID-19の影響でやむなく中止・延期や遠隔開催などの対応を余儀なくされてきました。2023年に入り、世界的にもCOVID-19に対する緩和措置が拡大してきたことを受け、ICHA2023は対面での開催となりました。ICHA2023には、40ヵ国（アジア、南北アメリカ、オセアニアおよびヨー

ロッパ等）から500名程度の研究者が参加し、口頭発表216件とポスター発表244件（ポスター発表の内容を5分で簡潔に口頭発表する“Ignite Talks”45件を含む）に加え、著名な研究者によるPlenary Session（9件＝招待講演）やWorkshop（5件）などで活発な議論が行われました。

私は、“*Chattonella marina* var. *antiqua*の増殖に与える数種珪藻類のアレロパシー効果”という演題でポスター発表を行い、活発な質疑応答を行うことができました。また、自身の発表だけでなく、他研究者の発表内容について質疑応答する機会にも恵まれ、大変良い経験となりました。国際学会と聞くと、参加者全員が流暢な英語で会話しているイメージがあると思いますが、前述のとおり世界各国から参加者が集まっているので、多くの方は英語が母国語ではありません。私は流暢に英語が話せる訳ではないので自身の“話すこと”と“聴くこと”の力不足を感じる場面もありましたが、それは相手（外国の研究者）も同様であるケースも多くありました。唯一、私と違うのは“上手く話すこと”ではなく“相手に自身の考えをいかに伝えるか？”ということに意識を集中させて会話をされている点だと思いました。しかし、この違いは思いのほか大きいことを痛感しましたので、今後の自身の話し方にも取り入れたいと考えています。

今回の国際学会参加では、様々な研究発表を聴講して今後の研究の参考となる有用な知見を収集することができました。また、Science Committeeの一員として大会運営（主に受付窓口を担当）にも関わることができ、濃密に英語に触れる機会が得られたことも大変良い経験になりました。これらの経験は機会をみつけて授業などで紹介したいと考えており、今後の研究活動にも活用していきたいと考えています。

着任のご挨拶

天鷹丸三等機関士 宮内 貴帆

初めまして。今年度より天鷹丸三等機関士に着任いたしました、宮内貴帆と申します。私は令和4年の3月に水産大学校専攻科船舶用機関課程を修了し、4月に水産庁に入庁しました。最初の1年は小樽の取締船に三等機関士として配属され、外国船による違法漁業などの取締に従事しておりました。荒れた海での取締の訓練、ロシア語や中国語などの外国語の勉強など、慣れないことが多く大変な時もありましたが、日本の水産資源を守ることに貢献できているというやりがいや自信を持って船に乗っていました。今年度より配属された天鷹丸は練習船なので取締と違い、学生の実習を目的にしていますが、大きなやりがいを持って楽しく働いています。学生としてたった2年前まで実習をしていた天鷹丸に、指導する立場として乗らなければいけないということに最初はとてもプレッシャーを感じていましたし、今も感じています。着任してすぐの頃、自分が専攻科の学生のときも思っていたましたが、乗組員のみなさ



活発な議論が行われている口頭発表会場のようす

んは本当にいろいろなことを知っていて、できないことがないんじゃないかというほどすごい人ばかりで、まだ経験の浅い就職したばかりの私がそんな風になれるのか？と思い悩むこともよくありました。しかし、学生の時にやっておけば良かったと思うことや、働き始めてすぐ必要なことは何かということが人一倍分かるのはきっと私だろうと思いました。また、乗船中の学生の気持ちや、慣れない環境での体調管理の難しさなど生活面においてもよく分かることがたくさんあるので1人1人の変化にも気付いてあげられるのではないかなと思っています。プレッシャーや悩みがつきることではないですが、このような今の自分にしか分からないことを武器に、私が教えられることや知っておいて欲しいことを話していきたいです。そして、天鷹丸に乗船してきた学生が、将来就職してから困ることが少しでもなくなるように、勉強面でも生活面でも役にたつことがで



きたらと思います。まだまだ未熟な私ですが、学生達と一緒に実習し、共に成長していけることを楽しみにしています。全力で頑張りますので、これからもよろしくお願いいたします。

就 職 活 動

私が就職活動で苦労したこと

水産流通経営学科4年 大西 宏 汰

私が一番就職活動で苦労したことは面接対策です。就職活動において面接は必ず通らなければなりません。私は約20年間生きてきた中で面接をほとんど経験してこなかった所以就職活動を始めるまで不安が多くありました。3月下旬頃から書類選考を通った会社から面接試験に呼ばれましたが面接に慣れないため、当日緊張してしまい面接の二次試験を通過することができませんでした。多くの会社は4月から新卒採用の面接をし始めるので、多くの友人たちは4月末までには就職活動を終わらせており、不安や焦りが高くなっていました。私は面接に慣れることが重要だと思い、多くの会社を受けることにしました。受け続けると徐々にコツをつかめ、5月頃には内定をいただきました。6月までには複数の会社から内定をもらい、自分が納得のいく会社を選ぶことができました。就職活動を終えて感じたことは、面接は笑顔で受け答えをし、気を張り過ぎないことが大切だと思いました。また、面接では自己PRや志望動機など必ず質問されることがあるので対策をすることで安心して話すことができました。これから就職活動を控えている人は不安に思うことが多くあると思いますが先生や就職支援室の方の力を借りながら頑張ってください。

選択肢を増やす重要性

海洋生産管理学科4年 不動寺 春 紀

私が就職活動で特に重要だと感じたことは広い視野を持つことです。

私は水産資源の保護に関心があり、3年生の7月からそれに関連する業界に絞り就職活動を開始しました。ところが、いざ企業説明会に参加してみる

と、業務内容の誤認や、希望する職種が募集されていない等、理想と現実のギャップに直面しました。その結果、本気で入社したいと考える企業が見つからず、その後は特に進展のないまま過ごしました。しかし、3年生の3月に本校で開催された合同企業説明会にて、水産資源の保護に間接的に関わる養殖・飼料業界の企業説明会に参加したところ、魅力的な企業に出会い、縁ありまして内定を頂くことが出来ました。

この経験から皆様に伝えたいことは就活初期の段階で、業界の選択肢を絞らず、関心の薄い業界にも積極的に足を踏み入れてほしいということです。興味は沸かない業界について調べ、説明会に参加することは正直面倒くさいと感じるかもしれませんが、しかし、選択肢が多いと心に余裕が生まれ、様々な企業を客観的に視る力が養われる利点もあると思います。

さらにESや面接等の壁もありますが、自分の目標に向かい最後まで慌てず、諦めず頑張ってください。悔いの残らない就職活動になることを心より祈念しております。

就職活動にあたって

食品科学科4年 中 道 智 也

就職活動はこれからの人生を決める重要な選択であり、今後数十年勤めることになる会社を決めることは、アルバイトの時とは全く違う感覚で緊張感も桁違いになってきます。その中で重要になってくることは、自己分析と企業研究だと思います。予め自己分析によって自分の性格や職種の向き不向きをしっかりと理解し、そのうえで、インターンシップや説明会などに参加して就職活動をスタートして欲しいと思います。

とにかく自己分析に多くの時間を割くことに躊躇しないでください。自分自身を深掘りしていくこと

で、エントリーシートの作成や面接時の応答に苦労することは少なくなると思います。自己分析に行き詰ったときは友人の力を借りることも一つの手であり、自分では気づかない長所が明らかになったりします。

面接については、個人面接、集団面接に関わらず今までに感じたことのないような緊張感を覚えることがあると思います。しかし、変に取り繕うことをせず、少し落ち着かせて緊張感も楽しんで、自分らしく面接官との対話を享受するのも良いと思います。何れにしても、自分の納得のいくように頑張ってください。

就職活動で重要なこと

生物生産学科4年 谷口 昂大

私は、山口県庁から内定をいただきました。就職活動は3年生の6月から行っており、公務員試験の勉強と並行して企業のインターンシップや面接を行いました。しかし、自身の就職活動を振り返ると、自分の将来について深く考えることができていなかったため、無駄な時間を多く費やしていたと感じます。

私は、就職活動において自分の将来像を確立させることが最も重要であると考えます。就職活動は長く、自身の忍耐力との勝負になります。そのため、目標となる将来像が欠落しているとやる気が低下し、モチベーションを保つことが困難になります。私自身、自分がどのような人生を歩みたいのかを考えたことで、その将来を叶えるために効率的な努力が可能になりました。この将来像は魚に関する仕事で働きたい、地元の友達と遊びたい、彼女と一緒にいたいなど、どのようなものでも良いと思います。

まだ就職活動を始めていない人や、モチベーションの低下を感じている人は、今一度、自分の将来について考えてみてほしいです。最後に、後輩の皆さんが悔いのない就職活動を行えることを心から願っております。

進学と就職活動を経験して

水産学研究科2年 水産資源管理利用学専攻
藤井 香帆

私は、国立研究開発法人水産研究・教育機構の研究開発職に内定を頂きました。私が研究職を志すようになったのは、学部4年の春頃です。当時は、将来の目標が不明確で漠然と就職活動を行っていました。自分の就職活動の在り方に迷う中、本格的に始まった研究室の活動に打ち込んだことをきっかけに研究の楽しさや自分の特性を知り、進学して研究職を目指すことを決意しました。研究科では、多忙な中でも研究の楽しさや将来の目標をモチベーションとして前向きに研究を行えました。その経験が糧となり内定を得ることができたと考えています。

進学も就職活動も準備を始めるのが早いほど有利です。進路についてまだ漠然としているのなら、普段の授業や生活の中から自分の得意なことや興味のあることを見つけ、それに打ち込む経験をしてほしいです。その経験が将来の目標を決めるきっかけや、挑戦を続けるための自信、そして就職活動時の武器として活きると思います。

最後に、私の就職先は日本の水産業のために研究を行う機関です。水産大学校で培った力を活かしながら研鑽を積み、研究成果を社会に還元することでお世話になった方々へ恩返ししていきたいと思っています。

図 書 館

この一年を振り返って

学生部図書課 課長 田村 賢

令和5年5月8日、図書館2階や1階閲覧室の立ち入り制限を解除し、恐る恐るではありましたが、コロナ禍以前のような利用しやすい図書館に戻しました。学究を目的とする外部の方にも再び利用して頂けるようになり、図書館に活気が戻ってきました。

【図書館の仕事】

図書館では普段目にする貸出・返却などの窓口業務の他に、以下の業務を行っています。“財産（書物）の管理”として、新着書籍や雑誌の登録業務、蔵書の点検、先生方の退職・転出に伴う特別長期貸出し図書の所蔵替え作業、書庫に保管されている雑誌類（未登録分）の整理・登録作業、永く保管していく雑誌を製本し、資料IDを付けて登録する作業があります。“研究活動の支援”としては、ILL（文献複写・相互貸借依頼）業務と電子ジャーナル（収

録論文をPDFファイルで収集閲覧できる）の購読契約（単年）締結に向けた調整業務があります。令和5年中は約4000冊の所蔵替えがあり、およそ1700件の雑誌の登録を行い、ILLでは289件の依頼を受けました。本校図書館の最重要な行事（学生の皆さんが対象）には、毎年秋に開催している「水産大学校読書感想文コンクール」があります。第12回となる今年度も5つの課題図書を選定し、作品を募ったところ、5件の応募がありました。実際には、課題図書を借り出した学生は37名と多く、このうち、応募をしなかった数名から、締め切り後に、「授業の課題提出で忙しくなり、作品の完成に至らなかった」との声を聞くことができました。読書感想文コンクールへの潜在的な参加者は多いようです。

【開館時間の延長】

普段は9時～17時までとしている図書館開館時間を定期試験期間中に限り9時～20時に延長する取り組みをおこないました。グループ自習スペースとして開放した閲覧室では、時おり、ホワイトボー

ドを活用したグループ学習が展開されていました。また、定期試験の勉強のためだけではなく、卒業論文(研究)での調べものや就職試験対策、資格試験対策のための利用も見受けられました。延長時間帯の利用者数は、多い日には40人を超えることがあり、図書館を学習の拠点として利用する学生は少なくないと言えます。

【本校内外への情報発信】

図書館は人を集めて情報発信をおこなう場としても適しています。8月のオープンキャンパスでは、開放的で明るい1階の閲覧室にて、本校草創期からの歴史が見渡せるような写真展示をおこない、多くの来校者に見学して頂きました。11月～12月中には、山口県大学 ML(博物館・図書館)連携特別展(テーマ:うみだす)に参加しました。本校図書館のサブテーマを「水の世界から産みだす糧」として、水産振興に貢献する本校5学科の代表的な研究成果を紹介するパネル、発表論文などの資料や開発した成果物を閲覧室に展示しました。展示期間中の来場者数は外部の方を含めて100人以上に上りました。

【皆様に支えられる図書館】

年に数回、本校の退職職員や現役職員、本校図書



開館時間の延長(9月の定期試験期間中)
を利用してグループ学習に励む学生たち

館をよく利用される外部の方から新刊本などを寄付して頂くことがございます。これまで図書館運営に携わってきたスタッフや図書委員、読書感想文コンクール審査員といった多くの方々の尽力によって、今日、「皆様に支えられる図書館」として成長していることを有難く思い、今後のさらなる利用増加を期待するところです。

学生部だより

就活生へのメッセージ

(株)極洋 大阪支社 水産部 水産第4課
山 根 強

私は平成28年3月に水産流通経営学科を卒業し、水産物を中心とする総合食品会社の(株)極洋に入社して現在8年目になります。入社から6年目までは、業務用冷凍食品を販売する部署に配属され、主に外食、C&C病院、老健施設ルートへの営業を担当しました。6年目の終わりに現在の大阪支社へ異動となり、現在は組織変更に伴い、量販店水産部門を専門に担当しています。担当商材の幅が広がり、販売量も大幅に増え、大きなやりがいを感じ日々営業活動しております。

学生時代には、課外実習やサークル活動などで漁村地域の方々との交流の機会が多くありました。そ

の結果、現在でも漁業者、生産者の方々の想いや、流通についてしっかりと理解した上で営業をするように心がけており、私の営業スタイルの原点になっています。

特に在校生の皆様に伝えたいこととしては、大学卒業の前に就職活動というビッグイベントが控えています。企業は履歴書や面接、グループディスカッション、SPI等を駆使し採用活動をしています。どの企業も最終的には面接で採用可否を決めることが多いです。私は就活の際、出来る限りリラックスすることを意識しました。あくまで自然体の自分で話すこと。面接は一方的な質問の場ではなく対話の場だと自分に言い聞かせて面接やグループディスカッションに挑みました。

大学生の期間は長いようで非常に短いです。今の時間を社会に出る前の重要な準備期間だと捉え、講義、実習、サークル活動、アルバイト等、「やらされる」のではなく「自らやる」意識で様々な経験を積んで欲しいと思います。自分で経験したことは自然体で話ができる武器になります。自分をよく見せるよりも、相手に悪く映らないようにありのままの自分で挑んで欲しいと思います。

末筆ながら、水産大学校 在校生、教職員、卒業生各位のいっそうのご躍進のほどご祈念申し上げます。

「徳のある社会人」の育成を目指して

水産大学校 練習船「耕洋丸」 二等航海士
川 崎 康 平

本校練習船「耕洋丸」にて二等航海士を務めてお





実習生へ航海計器の説明を行う様子

ります川崎康平と申します。

出身は長崎県南島原市です。長崎県立島原高等学校を卒業後、2012年4月に本校海洋生産管理学科へ入学し、2017年3月に専攻科船舶運航課程を修了しました。

現在は水産研究・教育機構の航海士として所属しており、今年度より耕洋丸へ赴任しました。昨年度までは調査船「北光丸」(釧路庁舎)に3年間乗船し、主に北海道周辺海域における漁場環境調査・資源類調査、太平洋公海域におけるサンマ資源量調査、ベーリング海におけるサケ・マス類資源量調査等を経験しました。

現在は航海士として海上勤務をしておりますが、専攻科修了後は民間企業で陸上職に就いておりました。その後ご縁があり、当機構へ入職し現在に至ります。

陸上職に就いていた際には多くの人と関わり、海上職の世界と異なる視点で多くの経験を積みました。この経験は現在でも仕事を進める上で私の土台となっています。

耕洋丸へ赴任し間もなく1年が経ちますが、実習生への指導の中で私が重きを置いている項目に「挨拶・容儀の徹底」があります。

私が挨拶・容儀といった礼節を重視する根底には、学生時代は単に学問を習得するだけでなく、礼節を備えた人格の形成が職業の分野を問わず重要であると考えためです。私自身、社会人となった際に学生時代から礼節について徹底しておくべきであったと痛感しました。乗船実習は集団生活であることから、人への礼儀や思いやりを考える良い機会であると考えます。学生の皆さんには乗船実習において礼節について考える機会として頂き、他の人への思いやりを兼ね備えた「徳のある社会人」として社会へ船出して欲しいと願っています。

本校練習船では実学主義の旗印の下、水産業の将来を担う人材の育成を行っております。実際に船上での実習を経験出来るのは本校を選択した学生の特権であり、強みであると思います。この先乗船する学生の皆さんと船上で会える日を楽しみにしております。

工場の仕事

(株)ダイショー 関東工場

松 下 功 暉

ダイショーを希望して入社したのは、自身が福岡出身で、地元福岡が本拠地の全国区企業であり、プライベートでもよくダイショーの商品を利用して食べるほど好きだったためです。また、製造職では珍しく、ほとんどカレンダー通りに休日をとることが出来るのも理由の1つです。現在は製造職として、工場で製造オペレーターをしています。製造ラインで作られたたれやスープをパックに詰める機械を業務の中で操作して扱っており、その機械の動作確認や洗浄・切替え作業を行ったり、完成した製品に不良箇所がないかどうか検品を行ったりしています。

水産大学校では水産食品の衛生や加工、含有成分、栄養機能等について多くのことを学びましたが、実際に食品の製造現場に立つようになってからは、実習工場での製造学実習で学んだ実践的なことが最も役立っているように感じます。微生物汚染の防止など衛生管理に関してはもちろんですが、原料歩留まりの意識や、労働衛生上の安全かつ効率的な作業について考えることにも役立っています。学生時代は食品の品質管理に関して、包装容器の観点から気にすることはあまりありませんでした。しかし、製造現場に立つようになってからは製品ごとにパックの材質や特性が異なっていることがあり、それに対応した製造工程もそれぞれ必要になる場合があることが分かりました。そのため、製品の中身のみではなくパッケージも製品の一部であるという認識が強くなりました。私は入社してまだ2年弱と経験が浅いため、自分の担当ラインの業務を完璧にこなせるようになり、もっと責任のある仕事を任される社員になりたいと考えています。

在校生の皆さんも数年のうちに社会に出る方がほとんどだと思います。個人的な考えですが、休日にしっかりリフレッシュするために、社会人になってからも続けられる趣味を学生のうちに見つけておくことをお勧めします。

